【エッセイ】

フランセス・トロロープの「共和国」滞在記

── アメリカ民主主義嫌いの奴隷制反対論者 ──

杉　山　直　人

渡米の背景

初めての著作となる『内側から見たアメリカ人の習俗』を一八三二年に出版したとき、フランセス（ファニー）・トロロープはすでに五〇才を越えていたから、年齢的には、いささか遅いデビューではあった。だが滞在記は好調な売れ行きをみせ、経済的に苦境にあった彼女と家族を喜ばせた。「野火」のように売れたという。最初の一年でイギリス、アメリカ両国でともに四版を重ね、フランス語、スペイン語、ドイツ語、オランダ語にまで翻訳された。ロンドンでも、たちまち著名人の仲間入りを果たすことができたファニーは、息子の一人にバイロンよろしく「ある朝目を覚ますと、有名になっていた」とまで書き送った。

タイミングがよかったのである。おりからイギリスでは第一回選挙法改正をめぐる議論がピークを迎えていた。都市部を中心に選挙権が広範に認められて民主化が進んだ場合、社会がどのような変化をみせるかをめぐり、一足先に民主主義を標榜して実績をあげつつあった共和国アメリカへの関心がイギリス国内で高まっていた時期だった。イギリス国内における、こうしたアメリカへの注目をファニーは見逃さず、一八三一年八月に帰英したのちは部屋に閉じこもって、みずからの体験を短期間のうちにまとめあげ、翌年には出版にこぎつけた。狙いは成功したのである。出発まえは急進派に共感的だったにもかかわらず、アメリカ人の暮らしぶりを、あしかけ四年にわたる滞米生活のなかで観察した結果、アメリカ流民主主義に懐疑的となり、イギリス流王制体制支持派へと転向していった女性の筆になる滞在記が、耳目をひきつけることになったのは当然だったかも知れない。

アメリカに理想の共和国を思い描きつつも、渡米して現実を見せつけられたのちは失望するというパターンを、同時代の文豪チャールズ・ディケンズもやがて経験することになる。じっさい本書が提示したアメリカの理想と現実をめぐる乖離は、アメリカ人自身が国民文学の成立とともに、繰り返し探究するテーマへと発展してゆく。そこで本書がいまだに読みつがれる理由である辛口アメリカ批評について考えることになるが、そのまえに著者ファニー・トロロープが渡米するに至った理由を紹介しておこう。

大西洋横断定期航路が開設されたのは一八四〇年代だから、一八三〇年頃にはすでに新

旧両大陸の往来は頻繁ではあった。だがこの時代、ファニー自身が滞在記の最後で語るように、大西洋横断はやはり気苦労の多い「冒険」だっただろう。そんななかでファニーに渡米を決意させた理由のひとつとしてあげられるのは、一五歳年下の社会改良家フランセス・ライトが彼女に与えた影響であろう。本書でも登場するロバート・オーウェンとおなじく、いまのわれわれの言葉でいえば、「空想的社会主義」の信奉者だったライトは富裕な商人を父に持っていたが、「自由な社会」アメリカに憧れて渡米し、共和国賛美の旅行記を残した。アメリカ独立に貢献し、アメリカ人にとって自由と共和主義のシンボル的存在たるラファイエット将軍とも親しかったという。奴隷制が若き共和国の汚点たることを信じたライトは、私財を投じてテネシーにナショバという「コミューン」を建設し、黒人たちの教育と地位向上をめざした運動をおこす。この事業は失敗に終わったが、自由平等の大義に殉じようとしたライトにたいする友愛の念を、ファニーが失わなかったのは本書が語るとおりである。帰英後数年を経ると、やがてファニー自身も奴隷制を批判する小説を執筆して、小説家としての道を歩むことになる。

渡米にいたる理由はしかし、こうした思想的理念よりも、まずは経済的困難と家庭的混乱打開のためだった。トロロープ家の台所は一八二五年頃には火の車だったのである。ファニーが一八〇九年に結婚した五才年上の夫トーマスは、叔父から広大な地所を相続するはずだったが叔父の再婚によってかなわなくなり、農場経営もヨーロッパでの農産物価格下落が災いして、永らく順調とはいえない状態だった。家庭にも不幸が続き、一八二四年には一一歳だった息子アーサーが亡くなり、ほどなくして今度は父をもファニーは失った。

彼女にとって不幸だったのは、逆境におかれた家族への対応能力をめぐって夫トーマスが至らなかったことだろう。激しい気性の持ち主で偏頭痛に慢性的に苦しんでいた、ともいう。「家族は誰もが彼といっしょだと楽しくなかった」とまで子供に回顧されるような夫と妻が、冷えきった間柄になってしまったのは自然の成り行きだったかも知れない。またファニー・ライトに強い思想的共感を示していた二番目の息子ヘンリーは、ウィンチェスター・カレッジでの学業を放棄したあと、両親がなんとかお膳立てしてくれたパリでの職にもなじめず、再度渡米するライト一行に加わってアメリカで一旗揚げようと画策する始末。息子のために人びとの反対を押し切って、母たるファニー・トロロープ自身もアメリカに向けて出発するしかなかった。一八二七年一一月のことである。この時点でファニーが「百貨店」（荒このみ氏）を開設するというところまで具体的プランを実際に持っていたかどうかは別としても、次男ヘンリー同様に、機会の国アメリカでなんらかの将来への展望を切り開くためのチャンスを利用しようと考えていたであろう、とは推測できよう。

同行したのは息子ヘンリーとふたりの娘セシリア（一一歳）とエミリ（九歳）、男性と女性の召使い、それに三三歳になるフランス人画家オーガスタ・アルヴューだった。ファ

ニー・トロロープの滞在記を精読したことが分かっているマーク・トウェインに、このフランス人画家はファニーの再婚相手である、と錯覚させるほど親密だったかの印象を、滞在記は読者に与える。じっさいには言及されることは多くない。だが、経済的に追いつめられたファニーにたいし、画家は自分が描いた絵を換金して生活資金提供までして援助したことがわかっている。単なる友情ばかりではなかった、と思いこむ現代読者がいてもおかしくないだろう。本書に収録された二一枚のリソグラフもすべて彼の手になるものである。

のちには夫トーマスも渡米してくるが、ファニーが旅をともにしたメンバーは、それまで基本的にこの四人だった。思えば不思議な組み合わせである。一行四人と会ったことのあるアメリカ作家トーマス・ハミルトン（一七八九〜一八四二）は次のような印象を残している――「彼女（＝ファニー）は、ほんの少女にすぎないふたりの娘とフランス人といっしょに旅していた。どのような資格でフランス人が彼女といっしょだったのか、（ハミルトンには）しかとは判らなかったが、事態が奇妙で彼女ははっきりと貧しく、そのため彼女自身も娘たちも、ほとんどきちんとした服装をしておらず、上品な婦人たちがトロロープ夫人に注目してくれたり、彼女をレイディとして扱ってくれることはないのが確実だった。」――ファニー・トロロープ一行が、アメリカ人の目にどのように映っていたかを語る興味深い証言である。服装が貧弱だったのは、余裕がなかったというばかりでなく、ファニー自身が無関心だったともいう。どうやらアメリカ滞在中も現地の「上流階級」の人たちからは、どこか得体の知れないイギリスからのよそ者たちとみられていた、と考えたほうが事実に近いようである。また、あとで触れるように、滞米中に彼女は「起業」に失敗して多額の借金を負って帰国した。

こうした事情を知らずに滞在記を読むと、ファニーは気位の高い知的で（彼女は自分の懐具合は語らないので読者にはわからないから）比較的裕福な英国レイディであり、高踏的にアメリカ批評を繰り広げつづけた、という印象だけが残るかもしれない。だが、経済的理由のために、この書き手が滞米中アメリカ社会におかれていた居心地の悪さを、「観察者」としてアメリカ人を語る彼女の言葉を考えるさい、われわれは忘れてはならないだろう。

こんな立場におかれると、まわりの人びとの生活について語ろうとするとき、人は自然に自らのストレスや現実生活への不満を反映、あるいはときに暴発させる、ことになりかねないからである。アメリカ人にたいしてファニーがみせる辛辣さには、批判対象と直接には関係をもたない個人的理由が含まれているかもしれず、したがってアメリカ人（と彼らの暮らしぶり）にたいする彼女の姿勢を、読者たるわれわれは、割り引いて考える必要があるかも知れないことを、最初にお話ししておきたい。

ターナーのフロンティア論

出版直後から、本書は特にアメリカで物議をかもした。一八三二年夏、ニューヨーク在住のあるイギリス人旅行者の証言がある――「しっかりした市民たちのあいだに（この本が）引き起こした騒ぎたるや、まことに考えられないほどである。……ホテルの食卓でも、どの蒸気船に乗っても、駅馬車でも、寄り合いがあればどこでも、最初の質問は『トロロープ夫人をもう読みましたか』だった。」

本書はふたつの部分からなる――主にシンシナティでの暮らしぶりを描いた前半と、そののち西部を離れてアレゲニー山系を越えて東部入りし、帰英まえに大西洋岸のニューヨークやワシントンを含めた街を探訪したおりの印象記である。多くのアメリカ人を困惑、怒らせたのは、フロンティアの暮らしを語る前半部、つまり第一六章までの部分だった。

アメリカ人や彼らの暮らしにたいして「フロンティア」が与えた影響や意義については、フレデリック・ジャクソン・ターナーの議論があまりに有名である。

「アメリカ史におけるフロンティアの意義」や「西部の貢献」のなかで繰り広げられるのは、ヨーロッパ文明やその価値観に基づいて運営されてきた東部大西洋岸社会と、西部フロンティア社会との対比であり、フロンティアが東部社会の性格にどう影響し、現在に至るアメリカ社会全体のあり方をどのように方向づけたか、という議論でもある。この議論に従えば、当初イギリス依存型だった東部社会は、一八世紀にアレゲニー山系を越え、一九世紀初頭にはミシシッピ川以西へと広がっていったフロンティアがあったからこそ多人種混成型のアメリカ社会へと変貌することができた。現在の「アメリカ人」が形づくられてきたのである。フロンティアのかなたに広がる、ただ同然の土地を求める多くの移民が海外からフロンティアをめざしたし、いったんは東部社会に落ち着いた人たちも、さらに機会と富を求めて文明と未開の接点たるフロンティアへ移動してゆく。すべてをゼロから再構築する必要のあるフロンティアでは、既存社会での地位や肩書きは意味をなさないから、アメリカ型民主主義の確立と増進がうながされることになった。

ヨーロッパ型の社会はフロンティアにあっては、家族に基礎をおく自由な個人主義に根ざす初歩的組織へと解体され、したがって個人は横並びの存在となって共和主義的平等観念が行き渡る。確立された行政制度と、それが支える社会が存在しない以上、自らの考えと行動によって生活を営むしかなく、独立独歩の人間が生まれる。言葉ではなくて行動を重んずる活動的個人が社会の建設者なのだから、個人が自由に思いのままに生活して成長してゆく場たることを最大の強みとし、それを促すことを特徴とする文化が生まれる。フロンティアでのこうした暮らしに粗野で未発達な側面があることを、ターナーは認めており、トロロープが旅した一八三〇年頃のアメリカを「初歩的民主国家」と規定している。精妙な政治機構を高度に発達させる代わりに、自分たちの中から選んだ一人の人間によっ

て自らの立場を表明させる、という政治スタイルが好まれるのも、この時代のフロンティア社会の政治風土のなせる技であり、言うまでもなく、滞在記にも登場するアンドリュー・ジャクソンこそが、その代表者であった――おおむね、これがフロンティア論の骨子である。

ターナーの学説は多くの批判を受けて現在では修正が加えられている。また、多文化主義の考え方を知ってしまった現代のわれわれからすれば、首をかしげたくなる箇所もある。おそらく最大のものはネイティブ・アメリカン評価で、ターナー論ではかれらはまず、開拓者の邪魔者として扱われている。彼のフロンティア論がもつ論旨展開にあっては、ネイティブ・アメリカンの「犠牲者」としての側面は考慮する必要がないということだろうか。議論全体が建国百周年を経たのち、いよいよ世界の覇者としてアメリカが君臨することになる二〇世紀を目前に控えた、ナショナリズム高揚期の匂いを濃厚に漂わせた「西部讃歌」となっているようにみえる。だから「アメリカの知性は、その著しい諸特性をフロンティアに負っている」とまで断定されると、ターナーが論文を発表した一九世紀末の時代風土と、ベトナム戦争以後のわれわれの時代との乖離を感じないわけにゆかない。だがそれにしても、フロンティアがアメリカ人の性格や暮らしぶり、さらには社会制度のあり方にたいして与えた影響と重要性を明快に語った功績は、誰もが首肯せざるをえないだろう。

こうしたターナーの議論はフロンティアをめぐるマクロの鳥瞰的議論とも言うべきもので、建国以来のアメリカがみせてきた発展を念頭におきながら、国威発揚の意味を言外に込めた歴史解釈として、アカデミズム特有の論理的広がりと整合性をみせる。ところがいっぽう、同じようにフロンティアを語るにしても、滞在記を貫くトロロープのまなざしはミクロ指向である。フロンティアに暮らす人びとを、じっさいに彼らと同じ高さの目線で観察する姿勢である。庶民レベルでのフロンティア観察記録である。だから滞在記は全体として「事実」を写真のように写し取ることに力点があって、「事実」を統合して解釈するということはしない。断片的で、ときには非合理と思われるような生活のエピソードが登場する。ターナーの学説をフロンティアが放つ光りだとすれば、トロロープの語る「事実」はフロンティアの影ともなりうる。フロンティア正史にたいする「裏面史」ともいうべきものであろう。両者は一九世紀初頭の（中西部）フロンティア理解を相互補完する内容を備えているのである。

アメリカ流民主主義への懐疑

一八二七年のクリスマスにミシシッピ川河口からアメリカに入ったトロロープ一行は、ニューオーリンズでの短い滞在ののち、ミシシッピ渓谷を北上してテネシー・メンフィスに至る。「ユートピア」という心地よい名とは裏腹に、マラリアが横行するようなじめじ

めした環境や、みすぼらしい丸太小屋が数棟建つにすぎないナショバに失望したファニーは、オハイオ州シンシナティに翌年二月に到着して二年をすごす。

当時中西部フロンティアにあって、新興都市としてめざましい発展ぶりを見せていたシンシナティは、人口がすでに二万人に達していたという。さまざまな経験を経たのち、ファニーは一八三〇年三月初旬には東部に向かい、滞米中最後の旅行を楽しむことになる。（この旅の記録が第一七章以降）

シンシナティやそこに至る道中でファニーが目撃体験したものは、われわれから見ると、単に風俗的関心を呼ぶにすぎないものから、アメリカの建国理念にまでかかわるようなものまで多様である。だが、重要度から言って、アメリカ流民主主義への彼女の懐疑を最初に取りあげるべきだろう。ターナーが肯定するフロンティアの「文化的特徴」が、イギリス中産階級の秩序だった暮らしぶりを熟知できる立場にあった知的なイギリス婦人の目から見たときには、到底評価しがたいものだったからである。個人の自由が保証されたフロンティアの暮らしとは、いっぽうで耐えがたい犠牲を当人以外の人びとに強いるものでもある、というのがファニーの実感だった。

閑静で心地よい住宅のすぐ隣に豚の屠殺場を建設しても、それを当然の権利と考える個人が存在し、彼は法体系と社会慣習によって守られている――「イギリス人が享受する以上にアメリカで享受されている自由といっても、それはすべて法を守る人たちを犠牲にして、手に負えない連中だけが楽しんでいるにすぎない。」（第十章）とファニーは憤る。フロンティアの自由とは、周りの人びとの迷惑を顧みず、理不尽な手段に訴えても自己の欲望を実現しようとする輩を跋扈させる「無規制社会」とでもいうべきルースさを秘めているのである。規制を嫌うフロンティアの体質は教育現場にも顔を出す。ファニーに同伴して渡米したフランス人画家アルヴューが、ドイツ人経営にかかる美術学校で働くのを断念した理由は、生徒たちがうるさくて授業にならないからだった。ヨーロッパ式の規則を教室で行使しようとする画家にたいして、ドイツ人経営者は「ヨーロッパでは大いにけっこう、けっこうです、だがアメリカの少年少女は辛抱できまい、好きなことをする連中ですから。きっと次の日にはいなくなってしまう。」（第七章）

自由とならんで「平等観念」も、ターナーにあってはフロンティアの暮らしが育んだアメリカ的価値観だが、これにたいしてもトロロープは、自由にたいするよりいっそう懐疑的である。平等観念が個人の幸せな生活を阻害する例として、「召使い」のエピソードがあげられる。（第六章）彼女の体験によれば、シンシナティで最初に苦労したことのひとつが、有能な「召使い」を見つけることだったという。この仕事を若い娘たちが嫌うからである。ヨーロッパでは社会的に認められている「召使い」という職業は、シンシナティにあっては「家事奉公するくらいなら、赤貧に甘んずるほうがまし」とまで忌避される、という。平等の立場にある（もちろん白人）「市民」同士が、自分たちの私的な生活の場たる家庭にあって、使う者と使われる者という厳然たる上下関係の元に身を置いて暮ら

し、いっぽうはサービスを提供し、他方はそのサービスを受ける、というシステムをフロンティア社会は受け入れにくい、というわけである。

トロロープ家にやってきた召使いの娘は、家族とは別に、台所でひとりだけの食事をとるように求められて、さめざめと泣き、彼女をほかの家族ほど「立派ではない」とみなしている証拠だ、と抗議する――家族のみのプライベートな価値観と慣習によって決められる事柄を、いまのわれわれの言葉でいえば、社会的「差別」という観念と、この娘は混同してしまったことになる。社会における身分意識を、生まれて以来自然に身につけて育ったイギリス人とフロンティアのアメリカ人との違いが、トロロープからみれば意外な文化摩擦を生んだのである。

過去の伝統と慣習を基盤とし、長い時間の試練を経て成立した社会を背景にもつトロロープのような女性の視点に立つと、自由と平等を「享受」しているとされる独立独歩のフロンティア人間の暮らしは、不安定で危ういものにみえる。森の奥地を切り開き、自給自足生活を営む家族を訪れたトロロープ（第五章）がそこに見たものは、「ぞっとするような」孤独だった。家族のひとりが世を去っても、家族以外には葬儀に参列する人はなく、合唱隊の賛美歌も聞こえない。「梢をすぎる風だけが、家族の鎮魂歌となる。」自主自立のフロンティア生活とは、教会に税を納めることも、国王に頭を垂れることもない代償として、トロロープには耐えられないような孤立無援の日々を生きることにほかならない。

「自由」といい「平等」といい、「独立独歩」といい、それらを生んだアメリカ（特にフロンティア）流民主主義にたいして、トロロープは嫌悪をみせる。特に彼女がやり玉に挙げるのが、もちろん独立宣言起草者トマス・ジェファーソンだった。ファニーに言わせれば、「人は生まれながら自由で平等である」という宣言中の一節は「悪意ある詭弁」（第七章）、ということになる。絶対王制、封建体制、共和制など長い歴史のなかでさまざまな政治形態を国民が体験ずみの国からやってきた、このイギリス婦人から見れば、人間には生まれながらにして能力に差があり、自由といっても自ずと制約を受けるのが当然だという思いがある。彼女には否定しがたく思われる自明の理を、ジェファーソンをはじめとするアメリカの指導者たちも、心のなかでは知り尽くしているのに、大衆の支持を得て「権力と名声」を手中におさめるために、自らを偽ったのだ、とトロロープは糾弾するのである。口当たりのいいこうしたスローガンを繰り返すうちに、アメリカ人は過剰な自尊心を身につけるようになり、「俺（わたし）はあんた（あなた）と同じように立派だ」と信じこむ。当然、誰もが自分の考えを譲らず、自己主張を繰り返す。するとついには、アメリカ社会は軋轢の種を自分で育てあげることになるから、社会全体としての安定を欠く結果となってしまう――トロロープが語る民主主義不信は、それぞれ異なる人間の能力と、その能力をどう評価し、多種多様な個人を社会のなかにどう位置づけるか、という今日的な問題にも連なる。

しかしそれにしても、アメリカ民主主義を「詭弁」という言葉まで使ってトロロープが

批判する根本的理由は、ふたつある。最初はもちろん奴隷制の存在である。ネズミ駆除のために準備されたヒ素入りバターを塗ったパンを誤って口にし、危うく命を落としそうになった黒人少女を抱きかかえて介抱するトロロープを見て笑い転げるアメリカ人家族のエピソード（第二二章）、自分が深南部に売られるのを知ってしまい、恐怖のあまり一時間もしないうちに斧で自分の左手首を切り落とす奴隷の境遇（第二二章）など、奴隷制の恐ろしさとおぞましさを感じさせるエピソードには事欠かない。南部ばかりでなく、北部でも男女奴隷に子供を産ませ、育て上げた子供を売り飛ばして蓄財に励む「ブリーダー」をめぐり、その非人道性に言及するのをトロロープは忘れない。

ジェファーソンが女性黒人奴隷と交わり、子供までもうけていたことを、われわれは事実として今では確認済だが、トロロープの時代にもすでにこのことはよく知られていたとみえ、いくどか言及している。ただし、噂を真に受けすぎてもいるようで、ジェファーソンが、まるで手当たり次第に誰彼なく奴隷と交わっているような書き方になっている。ジェファーソンをめぐるスキャンダルの真偽が公平に語られているというより、レポーターたるトロロープの興奮ぶりが印象的なのである。義憤に満ちた彼女の筆致は、どちらかと言えば激しやすいトロロープの性格をうかがわせよう。

奴隷制にうかがえるアメリカの偽善にトロロープは怒っている。「人間はみんな平等で、おなじように立派である」という高邁な先進思想に基づいて独立を勝ちとり、対外的にもそのように吹聴するアメリカ国内でトロロープが見聞したのは、美しい言葉の響きとは正反対の現実でしかなかった。気に入らないことがあると、男はすぐに奴隷に暴力をふるうし、男性の肘に触れるのを不作法と心得て、食卓では不必要なまでに慎み深い若い女性が男性奴隷のまえでは下着姿になっても平然としている。あげくに奴隷とも交わり、もうけた子供を召使いとして、おなじ屋敷に住まわせる元大統領。奴隷制のためにアメリカ人の精神がむしばまれていることを、トロロープは疑わない。

アメリカ民主主義罵倒のふたつめの根深い理由は、連邦政府がインディアンを裏切り、彼らから土地を収奪しつづけたことである。インディアンにたいする連邦政府の不実な姿勢について、トロロープは言葉数こそ少ないが、奴隷制と並べて次のように言う。

> ふつうの廉直さを備えた精神の持ち主なら、アメリカ人の原理と実践に矛盾があることに反発しないわけにはゆかない。アメリカ人がヨーロッパの政府を激しく非難するのは、彼らの言い分だと力ある者をひいきして弱者を抑圧するから、という。この件は議会で熱心に討議され、居酒屋でも大合唱、どの家の居間でも議論されるし舞台では皮肉られ、それどころか説教壇からは呪いの言葉で公言される。彼らの言い分に耳傾け、国内でアメリカ人がなにをしているか見ればいい。片手は自由の帽子を高く掲げているくせに、もう一方の手は奴隷を鞭打っているではないか。奪うことのできない人間の権利について大衆にお説教しているかと思えば、次には、もっとも厳粛な条

約によって、自分たちに保護する義務がある原住民を、ふるさとから追い出しているではないか。（第二〇章）

奴隷制といい、インディアンからの土地収奪といい、トロロープのアメリカ観察には現代の多文化主義の考え方と通底し、それらを先取りする視点があることは興味深い。

フロンティアの風俗――トロロープとトウェイン

アメリカの政治理念をめぐる記述を離れ、今度はもっぱら風俗面に限ってみると、滞在記が繰り返し採りあげる話題には、一、アメリカ人の礼儀作法、二、女性の暮らしぶりと地位、三、宗教集会などがあろう。語られる内容を具体的に検討してみると、いずれも現代読者の目には奇異におもわれるものが多く、二世紀近い時のながれを実感させる。

ありふれた作法がテーブルではすべてまったく守られず、食事は手づかみでガツガツむさぼり、洗練されないおかしな言い回しに発音、忌まわしい唾吐きのために、わたしたちのドレスが汚れてしまうのを防ぐこともできず、食事といえば、刃先が全部口のなかに入り込んでしまいそうなほど恐ろしげにナイフを使い、もっと怖いのは食後ポケットナイフで歯を掃除すること……（第三章）

渡米後間もない頃、メンフィスに向けて蒸気船で旅をしたファニー一行が食事になると体験せざるを得なかったフロンティア流「食事作法」である。数年後、シンシナティをたって東部を旅することになるトロロープは、この引用以外にもあれこれとアメリカ男性の「不作法」ぶりを報告することにはなる。噛みタバコをあたりかまわず吐き散らしたり、観劇中のボックス席では、上着を脱いで手すりに腰を下ろしたり（リソグラフ参照）と男性のお行儀の悪さは、東部でも見られる。だが、引用はなんといっても（この場合は南西部）フロンティアの男たちの暮らしぶりを見事に捉えたスナップとなっている。

実はこの箇所はマーク・トウェインの『ミシシッピ川の暮らし』に収録されている。しかもトウェインは、トロロープが目撃した男たちのなかには「多くの貴族農園主」が混じっていた、と自分は見たわけでもないのに付け加えている。トウェインには思い当たるふしがあったのだろう。彼の説明にしたがうと、この食事場面に見られるような男たちの振るまいは簡単には消えず、自分の青年時代にも変わっていなかった、という。作家のいう「青年時代」が、いつ頃を指しているのかはトウェイン所蔵本の書き込みによって推察可能で、それによると「大体において、二五年まえでも事実」とある。『ミシシッピ川の暮らし』は一八八三年の出版だから、トウェインがいう「青春時代」とは、だいたい一八五〇年代であろう。彼が一八三五年生まれだから、勘定があう。自らが思い描く南北戦争

直前の典型的プランター像のひとつを、文豪はトロロープの男たちに見いだしていたことになる。引用したトトロープの目撃談から、すでに三〇年ほどを経過した時代なのである。

ヨーロッパ人が描いたアメリカ旅行記のなかで、トロロープのものを最も気に入ったトウェインは本書を精読したとみえ、メモまで一〇カ所以上書きこんだ蔵書が残っている。興味深いものがあるので、いくつか紹介してみよう。例えば、先に紹介した「召使い」の件で苛立ったトロロープが、やっと見つけた娘をイギリス流に「サーバント」ではなくて「お手伝いさん」（“helper”）と呼ばねばならないことにあてつけて、「自由な市民を召し使いと呼ぶのは、共和国への卑劣な背信行為」にあたるのだろう、と当てこする箇所が出てくる。（第六章）「アメリカ流民主主義」に懐疑的だった彼女は、サーバントの一件をさっそくアメリカの国是批判にむすびつけたのである。苛立つ彼女をユーモリストとしてのトウェインは楽しんでいるようで、「うまい」（“A fair shot”）と書き込んで笑っている。トウェインはトロロープの辛口アメリカ批評のなかに、自分自身と同じ体質を嗅ぎとっていたのである。

さて、トロロープが目撃したフロンティアの礼儀作法が、一世代後でも変わっていないことを語ったトウェインだが、逆に時が南部にもたらした激変ぶりも、トロロープ滞在記の記述を用いながら『ミシシッピ川の暮らし』で明らかにしている。トウェインの「現在」にあってはすでに近代的な都会としての顔を備えた代表的なアメリカの大都会が半世紀まえ、イギリス人旅行者にみせた鄙（ひな）としての姿に、トウェインは関心を示した。例えば、半世紀まえのメンフィスの様子を文豪が自らの旅行記で紹介しているあたりがそうである――「丸太小屋が並ぶ長い通りが一本と、森にむけて中心から離れて小屋が散在し、豚がときにいて、あとは泥の海」しかなかった、とトウェインが紹介するメンフィスの姿はトロロープの記述と一致している。

船着き場から丘の上にあるホテルに到着するまで、ぬかるむ泥道を歩くしかなかったトロロープ一行は、ホテルにたどり着いた頃には「靴も手袋もなくしてしまった」という（第三章）。半世紀後にミシシッピ川を下りながら旅するトウェインが見たメンフィスは、商業中心地のひとつとして人口が四万人を超える都会でリスが遊ぶ公園や小綺麗な住宅が立ち並ぶ近代都市へと変身済みである。

『ミシシッピ川の暮らし』が語るシンシナティの記述にも、トロロープの滞在記が情報を提供しているらしいところが見つかる。六五年まえ（つまり一八二〇年頃）のシンシナティを、トウェインが「豚と宗教」に心よせる町と定義しているのはその好例だろう。トロロープのシンシナティ紹介には、たしかに養豚業と伝道集会をめぐるエピソードが多くみつかる。各家庭から排出されたゴミは通りの中央に置かれ、豚が食べるに任された、と『ミシシッピ川の暮らし』でトウェインは解説する。そうすることでゴミの腐敗が防がれ、各家庭の健康も保たれたというのだが、現代読者としては、ちと話がおもしろくできすぎ

ていて「トウェイン一流のホークスにひっかかったのではないか」と考え込んでしまう。しかしこのエピソードも、じっさいにトロロープ滞在記にあるとおりなのである。

女性の地位と教会活動

目に見える形で変わったもの以外でも、トウェインが変化を感じるものは多いが、フロンティアの風土を考慮したとき興味深いのは、女性の地位と教会が社会で果たす役割である。

トロロープの滞在記を読んだとき、現代読者のひとりとして訳者が意外だったのは女性が開拓時代の西部で置かれていた立場である。かならずしも地位が低いというのではないが、女性は「家庭」にあって良妻賢母たることが求められ、逆に男性には行動の自由が当然とされている。結果として、職場で勤務時間を終えた夫たちは帰宅後も家庭にはいつかず、ふたたび男たちだけで集まり、タバコの臭いとウィスキーに酔いしれながら、自分たちだけで遊技や飲食を楽しむことになる。妻たちにすれば愉快な暮らしとはいえない。夫婦の協力のもとに、家庭が築かれてゆく、というスタイルではないから。

女性の社会進出はほとんど感じとれず、夫が妻をともなって公の場に出て、ともに行動して楽しむという習慣が、たとえばシンシナティでもメンフィスでもみられない、というのがトロロープの観察である。パーティに共に出かけても、食事になると夫婦はバラバラに、それぞれ男性グループと女性グループに別れて集まり、双方とも別室で食事する。だから夫婦単位ではない。共同体が夫婦分離の社会生活を是認しているのである。

独身の男女にしても互いに知りあう機会が、町ではじゅうぶんに提供されてはおらず、たまにパーティがあっても、男性と女性はこれまた別々のグループとして行動し、個人的に交際するチャンスが乏しい、とトロロープはみる。こうした男女分離の社会生活と、女性の活躍の場が乏しいフロンティア社会を見るにつけ、女性の置かれた地位にトロロープが批判的だったのは理解できる。だが、半世紀がすぎたトウェインの時代には、そのような男女のあり方は、すでに過去のものだったのだろう――トウェインは「これも変わってしまった」とぶっきらぼうに書き込んでいる。

家庭では夫から省みられることが少なく、かといって、妻や若い女性が家庭のそとに自己実現をはかるシステムが発達しているわけでもない社会にあって、女性たちはどのような形で不満を解消したのだろう――この問いにたいするひとつの答えが、トロロープの滞在記には準備されている。教会であり、特に野外でおこなわれる「伝道集会」（“camp meeting”）である。宗教が暮らしのなかで、どのような位置を占めていたかをめぐっては、少なからずページが割かれている。特に女性と宗教との関わりについての記述が豊富である。「規模の小さな市や町では、祈祷会がほとんどすべての娯楽の代わりとなっている。」（第一一章）からである。

家事に忙殺されて外出もままならないフロンティアの女性たちが、着飾って外出することで気分転換が図れるのは、社会的に公認された教会に出かけ、そこでの集会に出席するときくらいである。そこには、彼女たちが思いの丈をぶちまけることのできる牧師という「男性」が待ち受けている。滞在記全体をとおし、トロロープは女性の信者にたいして、牧師や説教師がどのような態度をとっているかを観察し、事細かに記録するのを忘れない。信仰と信仰をめぐる男女のかかわり、聖と俗にむけられた複眼的観察である。そうした観察の結果から導き出された結論は、『緋文字』にあるとおりで、「指導者と信者」という関係が「男と女」に置き換わってしまう例など、いつの時代でもありふれている、ということである。「宗教がこれほど強い影響力を女性にふるい、逆に男性にはこれほど影響力を持たない国など、わたしは見たこともなければ読んだこともなかった」（第一一章）というのが、驚きとも嘆きとも、はたまた呆れともつかない、トロロープの感想であるが、聖と性をめぐる隠微な展開が彼女の滞在記を読む楽しみのひとつになっているのは見逃せない。

一八世紀末から一九世紀初頭にかけてニューイングランドを中心に信仰復活運動が起こり、その動きがやがてアパラチアン山脈を越え、一八二〇年代から三〇年代にはオハイオ南部、ケンタッキー、テネシーなど当時の西部フロンティアに拡大していったことを、われわれは知っている。運動の中心はバプティストやメソジスト、あるいはプレスビテリアンといった伝統的な教会だったが、同時に比較的新しいデノミネーションも積極的に布教拡大に努めた――第二次大覚醒である。知識としては持っているこうした宗教運動の実態がどのようなものであったのか、トロロープの滞在記は有力な証言を提供してくれる。

世故に長けた五〇才の女性から見ると、伝道集会とは見ず知らずの男女同士が密かに出会う場、危ういバランスを保ちながら信仰と性的刺激とを一定の枠組みのなかで、同時にともに満足することのできる便利なチャンスでもあった。若い娘が説教師の言葉に興奮し、極端な場合にはヒステリー状態に陥る様子が、ときに紹介されるのも、そうした事実をトロロープが見ぬいていたからである。

こうして宗教は西部フロンティアでは、良きにつけ悪しきにつけ、影響力を特に女性にたいしてふるった。いずれかの教会に属していないと「クリスチャンじゃない」（第一一章）と噂されもした。人びとからそう言われることは、小さな共同体のなかで個人、なかんずく女性の立場に悪影響を与えたのである。とはいえ、娯楽をも含めて近代的都市としての機能を西部フロンティアが備えていなかった時代にあって、一皮むけば赤裸々な人間同士のうごめきを秘めつつも、精神生活をめぐる営みには目を見張るものがあった、と言うべきだろう。こうした宗教への情熱や、社会でそれが占めた重みはトウェインの時代には消え失せていた。トロロープの滞在記のなかで、彼が見つけた最大の変化のひとつだっただろう。「特定の信者集団に所属していないと、クリスチャンじゃない、と言われる」という、さきのトロロープのコメントにたいしては唯一言、「変わった」（“changed”）と

トウェインは書き込んだにすぎなかった。

女性の地位や人びとの宗教活動をめぐって、トウェイン自身の旅行記は一八八〇年代にミシシッピ渓谷に暮らす住民の生活のなかに、語るに足るだけの価値あるものを見つけないわけだが、この一九世紀アメリカ文学の傑作旅行記の成立にも、トロロープの滞在記がいくつかの素材や話題を提供したことだけは確かなのである。

シンシナティでの失敗

シンシナティでの人びとの暮らしぶりを辛辣に観察していたトロロープだが、われわれも今度は逆に、彼女自身の暮らしぶりについて、すこしは知っておく必要がある。彼女の「証言」ばかりに眼を奪われ、フロンティアの人びとへの評価をわれわれが下げすぎることになるとすれば、それは公平性を欠いており、トロロープに甘すぎる結果となろう。

彼女自身は多くを語ってはいないが、シンシナティでファニーは経済的に厳しい状況におかれていた。悪戦苦闘ぶりをしのばせるエピソードはいくつかある。たとえば、生活費の一助にと、語学に堪能だった息子ヘンリーは一時間五〇セントで「効率的」ラテン語教授の広告を新聞に掲載したという。生徒は誰も来なかったが。愉快なのは、イギリスで人気を博していたアトラクションを真似て、姿を隠したヘンリーが「巫女」に扮し、好奇心に駆られた客が尋ねかけてくる（礼儀にかなったものなら）いかなる質問にも「託宣」を垂れるというものだった。ラテン語、フランス語、ドイツ語、それにイタリア語まで用いたというのだが、いったいどんな預言を語ったのだろう。

それにしてもシンシナティでのファニーは、将来の暮らしにまで影響するような多大の借金を抱え込むことになった。「バザー」建設である。「バザー」の実態がどのようなものであるかをめぐっては、資料によってニュアンスの違いがあるが、どうやら現在のモールに近いものをイメージすると、まず的は外れていないようである。つまり高級品中心の店舗、劇場、コーヒーハウス、展示室、読書室、講義室など、歓楽街の機能を少しずつそなえた娯楽の中心地を、発展するフロンティアの町に造ろうとしたのである。狙いは悪くはなかったのだろうが、もくろみ通りには事は運ばなかった。

シンシナティ初のガス灯を「バザー」に備え付けるために、その費用を前金で支払うと、相手のイギリス人が金を持ち逃げしたし、夫トーマスがイギリスから発送した「らしい」四千ドルに及ぶ商品は、到着してみると見かけ倒しで売り物にならず、あげくの果てに「バザー」建設費未払いのために資産を全部差し押さえられてしまう。おまけに完成した建物は人びとの冷笑をかう代物でしかなかった――煉瓦造りの建物は、スカラップ装飾が施された胸壁の下にある窓がアラベスク風でギリシャ風円柱に囲まれ、丸天井はトルコ風のものだったという。「エキゾチック」といえば聞こえは良いが、人びとは陰では「シンシナティの偉大な奇形」とさげすみ、果ては「建築的怪物、トルコ風バベルの塔」とまで

噂した。「ギリシャの乙女たちの列に混じったベリーダンサーのように目立った」というのである。出費はかさみ、二年後に失敗に終わった「バザー」をあとに西部を離れざるをえなかったときには、帰りの旅費を工面するのも苦労したほど、ファニーは困窮していたようである。わずかな記述を除くと、滞在記のなかでシンシナティにおける苦い投資体験をめぐって、彼女が寡黙を守るのも不思議ではない。アメリカ人への辛辣なまなざしを自らに振り向けていれば、コミカルな自虐的自画像をつくりあげることができたかもしれないが、英国レイディとしてのプライドは、それを許さなかったのである。

「ヨーロッパ化」とアメリカ

アレゲニー山系を越えたのちのトロロープの旅を読みつづけると、アメリカとアメリカ人を語る彼女の筆致に起きるかすかな変化に気づこう。「一行のなかで出発を喜ばしいと感じなかった者は、ひとりもいなかったと信ずる」（第一七章）とまで彼女に語らせるほど不快だった（らしい）シンシナティに別れを告げたのち、帰国が近づいたことも手伝ってか、ファニーの辛辣さは以前の鋭さが鈍りがちである。アメリカ人の暮らしぶりにたいして、シンシナティにいたときほどの反感を覚えないようである――「奴隷制」と「インディアン」の件を除いての話だが。

ファニーの気持ちが和らいだわけはふたつあろう。ひとつは、フロンティアに見られる人跡未踏の荒々しい自然がじょじょに姿を消し、彼女のまえに展開してゆく自然が人為的にコントロールされることが多くなるからである。連邦政府や州政府などの資金を使って「自然改造」がおこなわれた結果、人工的で、ときには洗練されたイギリス風庭園まで顔を出したりする。園芸好きのファニーには、これは楽しみだった。こうして自然を人間が征服、あるいは両者が調和できれば、そこには文化的基盤を備えた共同体社会がおのずと生まれる。ファニーの場合、アレゲニー山系を越えた旅は、ヨーロッパ文化を基盤としつつ、アメリカ大陸で独自の発展を遂げた東部社会へと最終的には連なっていった――これがふたつめの理由である。

一八三〇年当時には、まだフロンティアが広がっていたオハイオ川周辺とは違って、ヴァージニアを中心とするアレゲニー山系周辺の風景には、さすがのトロロープをも感嘆させるような美しい自然が見られ〔「これほど心そそられる地域をわたしは見たことがなかった」（第二一章）〕、彼女の母国を彷彿させる花々が咲き乱れる畑や庭を備えた家並みもみつかる。密林のなか、道なき道を進む代わりに、連邦政府が整備した道路を馬車で進むこともできるようになる。開発が進み、われわれのいう「インフラストラクチャ」が整備された地域に入ったことで、トロロープは地域差を明快に認識するようになる。「アメリカ西部をとうとう後にした」（第一八章）と感じるのである。森林を切り開いた生存のためのギリギリの場ではなく、一定の限度内とはいえ、イギリス式の暮らしや文化の基盤

たるヨーロッパ文化との接点を、ファニーはアメリカ東部に見つけ出すようになる。「分量が豊富に調理されて上品でさえ」（第一八章）ある食事、「快適な暮らし」（第一九章）が営まれているのがわかる小綺麗に立ち並ぶ家々、ミサにあづかる美しく着飾った女性たち（第一九章）など、大西洋岸の東部エスタブリッシュメントは、ファニーをむしろ喜ばせた、と言うべきだろう。

東部社会には母国の文化水準に到達できるだけの基礎が整っている。教育現場も例外ではない。イギリス女性が経営する、バルチモアの幼児学校について語るトロロープの筆からは、子供たちの礼儀作法への賛美が聞こえる――「男の子も女の子も服装は優雅できちんとして、ひとりびとりに発言するように求めると態度も上品で知的、アメリカの子供たちの礼儀作法に目立ってはびこっている不作法な無関心というものがなかった。」（第一九章）ここで最後にトロロープがいう「アメリカ」とは特にフロンティアを念頭においてのことであり、東部社会ではない。粗野な西部文化をあれほど嫌った彼女は、ここでは恩着せがましささえ感じさせるような好印象を、アメリカの子供たちに示す。イギリス風の教育やしつけさえすれば、東部社会の子供たちもイギリスの子供たちに負けず劣らず、立派に成長するだろう、という論法である。

アメリカ合衆国のシンボルのひとつ、連邦議事堂については「大西洋のあちら側で、これほど堂々たる建物を見ることになるとは、わたしたちは誰も期待していなかった」とまで賛辞（第二〇章）を惜しまず、フィラデルフィアの貯水場紹介では、「（噴水からほとばしる）銀色のしぶきが雪のように白い大理石でできたギリシャ神話の水の精ナイアスの頭上に降り注ぐ。この像はギリシャの彫刻家フィディアスが創ったわけではないが、暗く岩がちの背景に花のようなキササゲが影を落としては明るい陰から姿を見せるその様子は、まれに見る美しい眺めである。」（第二四章）と称える。ニューヨーク港の素晴らしさを語る言葉（第二九章）からは、ファニーの興奮が伝わってくるわけで、ヨーロッパ文明や文化をアメリカが吸収同化できている、と自ら実感できる「アーティファクト」に接したとき、彼女の口からはアメリカ賛美が自然にもれるのである。だから、たいして見物すべきものも見あたらないフィラデルフィアでも「合衆国銀行とフィラデルフィア銀行はもっとも目立つ建物で、ふたつとも白大理石でできていてギリシャ風デザインで建てられ、ずいぶん華麗である」（第二五章）と評価することになる。ところが、同じフィラデルフィアについて語るときも、ヨーロッパの水準に達していないと彼女には感じられる社会的特徴になると皮肉なまなざしを向ける。

アメリカ女性がヨーロッパのように「社会的影響力」を持っていない（第二六章）ことについては、いつものように特に辛辣である。日がな一日、「ドーカス協会」に集まって仲間とともに刺繍に明け暮れる「上院議員兼弁護士」の妻について語ったあと、新婚夫婦が賄い付き間借りで暮らすことが社会的慣習となっていた（らしい）ことについて、これほど「女性の非重要性を確かなものにする有効な仕掛け」（第二六章）を自分は知らない、

と呆れかえり、「ヨーロッパでは女性たちに許され、賢者も世慣れた人も有益な結果が生まれると認める、社会でのああした影響力をアメリカでは女性が手に入れられないことになる。」（第二六章）と嘆く。西部フロンティアでも東部でも、社会における女性の地位や、その改善への努力がなされていない、（と彼女にはみえる）ことについてトロロープは不満なのである。

ヨーロッパ文化の吸収といえば、トロロープはアメリカの審美感覚が未熟で洗練されていないことも指摘する。生存することに追われる西部は仕方がないにしても、東部フィラデルフィアも彼女を呆れさせるのである。当時のアメリカは、まだピューリタン的潔癖さを多分に残していたようで、トロロープが訪れた「ペンシルバニア芸術アカデミー年次展覧会」では、男性ヌード彫像を「観賞」するのに女性は男性がいないときをめがけて展示室に入る。（第二五章）理由は言うまでもないが、ヨーロッパではこの時期には、こうした展示物を女性が男性とともに訪れることは慣習化していたらしく、「偽善的」と呼ぶにはあまりにナイーブなアメリカ女性の羞恥心を、ファニーは田舎くさい「野暮ったさ」と呼んでいる。

こうして具体例をあげると、アレゲニー山系を越えた旅をつづけるトロロープにとって、観察対象がヨーロッパ的だと感じられるかどうかが、ひとつの有力な「評価尺度」となっているのが、改めてわかる。滞在記の結論も、アメリカが「文化的改善」を遂げ、「アメリカ的平等に別れを告げ」ることができれば、「地上でもっとも素晴らしい国のひとつをヨーロッパ的親睦の輪のなかに歓迎することになろう」（第三四章）というものである。滞在記全体をとおして、アメリカ人が愛国的な言辞を著者たるイギリス婦人に繰り返し示し、彼女を辟易させたことが語られている――だがヨーロッパ優越主義に基づいてアメリカを批判するトロロープにたいし、観察される側にいるアメリカ人が反発するのは、あたりまえであろう。せいぜい半世紀前の独立のために多くの血を流したアメリカは、国家としてはまだ若くて未熟だった。芸術を育む土壌がないことを嘆いたワシントン・アービングやホーソンを持ち出すまでもなく、アメリカに歴史の陰影がないことは国民もよく知っていたはずである。知っていればこそ、ヨーロッパの人びとが自分たちをどのように見ているかを、トロロープ自身が認めるようにアメリカ人は過剰に意識したのである。（第三一章）だとすれば、トロロープにたいするアメリカ人の反発は、彼女が示唆するような単純な「傲慢さ」とばかりも言い切れまい――対ヨーロッパ・コンプレックスの裏返しだったかもしれないのだから。この滞在記が語ってくれるのは、フロンティアの影ばかりではなく、若々しい育ち盛りの青年期アメリカの、屈折した喧噪とも訳者には聞こえてくるのである。

（本エッセイは訳書の「解説」である。トウェインとトロロープを論じた部分は、
既発表論文と重複する。）

【Essay】

Frances Trollope's Stay in the "Republic"

── Travelogue of an Abolitionist who hated American Democracy ──

Naoto SUGIYAMA

While Mark Twain was writing *Life on the Mississippi* (1833), he read for reference some travelogues published in his youth by visitors from Europe.

Though he makes no mention of *De la Democratie en America* (1835) written by Alexis de Tocqueville which is now established as erudite records of the journey to answer the question "What is America?", he on the other hand highly applauds *Domestic Manners of the Americans* published three years earlier by the English lady. This article is an essay attached to a Japanese translation of this travelogue to comment on her impressions and evaluations of the people and their way of life in the East as well as the frontier life at large in the West.